江島由裕（大阪経済大学経営学部教授）

創造的中小企業の存亡

生存要因の実証分析

白桃書房　2014.2.　17, 249p.

1. 本研究の特徴

本研究は企業家的な戦略志向性（Entrepreneurial Strategic Orientation，以下EO）を全面的に変数として採用した我が国では数少ない研究の一つである。単なる中小企業対象の大規模アンケート調査であれば，政府系の調査がそれこそ星の数ほど存在している。その中にあって，欧米のトップジャーナルに十分通用するストイックで緻密な調査設計に加え，読んでいる側がひるんでしまうほどのエネルギーで進められたのが本研究の特徴であるといえる。

本研究は大きく分けて4つの大規模調査データを統合的に分析したものである。初回の調査は2000年に実施され1233社からデータを得ている。その2年後には同じ回答企業に対してアンケート調査を実施し，2時点の経年変化のデータを取得している。さらに2004年には1233社全てに対して電話による生存実態調査をおこなって，3時点におけるデータを突き合わせる形で調査対象企業の経営情報と生存・非生存がリンクしたデータセットを構築している。このデータが本書のタイトルである創造的中小企業の生存要因についての中心的なデータセットである。その研究結果を踏まえて，2008年には廃業リスクの高い創業後10年をくぐり抜けた設立10年企業を5200社抽出し，EOにこだわって大規模調査を実施している。

2. 本書の構成

本書は6章構成である。第1章は「本研究の問題意識と位置づけ」と題して，本研究の問題意識が提示される。国際的に観察される事実として，中小企業が設立後，一定の期間を経る毎に一定の割合で消滅する一方で，生き残った一部の企業が大きく成長して大部分の雇用を生み出すことを提示しながら,「なぜある中小企業は短命に終わり，ある中小企業は生き残ることが可能なのか。（中略）そこには生存に共通する要因があるのだろうか。」という本書の中心的なリサーチクエスチョンが示される。

第2章は濃密な先行研究のレビューである。タイトルは「生存の分析視角」とされ，企業のライフサイクル，長寿企業の生存要因，中小企業の生存要因について実証研究を中心とした先行研究のレビューがなされる。これらの先行研究から中小企業の生存に影響を与える要因として企業属性，経営資源，事業環境，戦略と経営姿勢の4要因を抽出し，本研究における分析アプローチが整理される。それぞれの要因は構成概念ごとにさらに詳しい先行研究のレビューがなされる。中小企業の「生存」に焦点を絞り，欧米の実証研究を広範にカバーしたこのレビューは類似の関心をもつ研究者にとっても価値の高いものとなっている。

第3章は「創造的中小企業の生存要因」と題して，2000年に，創造法認定企業1233社から回答を得たアンケート調査の結果を説明変数とし，2004年の電話による生存確認調査の結果を被説明変数とした定量分析がなされる。サンプルを全体サンプル（1233社），若年企業サンプル（259社），成長企業サンプル（446社）に分類し，それぞれで生存・非生存に影響を与える要因をロジスティック回帰分析によって分析し

ている。分析の結果，3つのカテゴリを通じて統計的に有意であったのは「販路の確保」のみであった。また注目すべき結果としては「コスト優位性」と「特許などの占有権制度」は，全体サンプルおよび成長企業サンプルにおいて，ともにマイナスの影響を持つことが明らかになっている。全体サンプルでは,「業界の慣例にとらわれないドメイン」も，マイナスの影響をもつことが明らかになった。若年企業サンプルでは,「販路の確保」のほかには「製品開発力」のみがプラスの影響をもっていた。

第4章は2000年に実施した1233社のアンケート調査と同じ内容の質問項目を2年後に実施して，2年間の戦略，経営姿勢，事業環境の変化を比較することで,その変化が2004年の生存・非生存にどのように影響しているかについて分析している。分析の結果として，戦略については「コスト優位性」「他者にないユニークな製品開発」，経営姿勢については「権限委譲，リスクに挑戦させる」「過去の経験にとらわれずに柔軟に軌道修正」の各要因が，生存企業に比べて，非生存企業は2年の間に大きく低下していることが明らかになった。

第5章では「設立10年の創造的中小企業の生存状況」と題して，2008年に新たにアンケート調査を実施したデータを用いている。この調査で測定されたのは生存状況，企業属性，事業環境認識，戦略，内部経営資源，外部経営資源の6つである。また海外の研究との国際比較を視野に入れて，個別質問項目はCovin and Slevin（1989）やMiller（1983）の質問項目に従っている。非説明変数は雇用成長と売上高成長の2つである。分析の結果，売上高成長においても雇用成長であっても，EOはプラスの影響をもつことが明らかになった。

第6章では，ここまでの3つの研究を包括する形で「創造的中小企業の存亡の鍵」についての考察がなされる。さらにこれまでの中小企業支援に対する政策的含意が導かれる。

被説明変数を生存・非生存にするか，雇用成長・売上高成長にするかで，分析結果が異なるものとなっているが，いわゆるリビングデッドも生存に含まれてしまうことを考えると，日本の中小企業をサンプルとした場合は，雇用および売上高成長を被説明変数とした方が，EOの影響が際立ちやすいのかもしれない。

3. 評者からのコメント

最後にこのような専門書の書評をする際の慣習に従ってコメントをさせていただくとするならば，大きく分けて次の2点であろう。第一にパス解析による新たな分析の可能性である。各説明変数から被説明変数への直接の影響だけではなく，他から影響を受ける内生変数を仮定すると，データセットの価値をより引き出せる可能性が指摘できよう。第二は，専門性の高さに起因する記述の複雑さである。この書籍は政策的にも重要な示唆を含んでいるが，欧米の論文専門誌並みの内容を読みこなすためには相応の訓練が必要になろう。一般の政策担当者には少々手強い内容であると考えられる。

とはいえ，冒頭でも述べたように，我が国の中小企業の戦略・経営態度と生存の関係に徹底的にこだわり厳密な測定と分析をおこなった本書の価値は大きい。このような内容の濃い研究を長期にわたって継続し，提供してくれた著者に，同じ分野の研究者として深く敬意を表したい。

（龍谷大学経営学部准教授　秋庭 太）